

一般論文

受付：2005.9.20
受理：2006.1.12

『Surface』シリーズ no.1

変化する表面の色

「心の深いところに見える色—セラミックに見る色彩の妙—」から

池田 晶一

日本福祉大学 情報社会科学部

“ Surface” series no.1

The change of a color of an appearance of a work

From the solo exhibition“ The color to be seen in a deep place of a heart
—The wonder of a color to look at to ceramic—”

Shoichi Ikeda

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract: The theme of my works is a color to change on the Surface of those.

My works have much information on the Surface. Quantity of information is related in time to understand the work. In addition, my works are concluded by contrast of "color" and "light and shadow".

The work is seen in a different color by an angle to consider. Form of a small ripple and a color in the Surface make the effect. A property and an effect of light of a color give a work an interesting expression.

The Surface series is classed in "color" and "light and shadow" version.

"Color version" is proved by comparison of a color, and "light and shadow version" is proved by a reflection of light.

Keywords: セラミック, 現代造形, 工芸, 色彩, Surface

1. はじめに

作品「Surface」シリーズは、2002年から現在に至るまで制作を進めてきた一連の作品群である。「Surface」シリーズの作品は、その作品の表面に独自のレリーフを施し、加えて釉薬や色化粧土^{*1}で色彩を施し、細かなレリーフの凹凸と、色彩と光が重なり合ったときに生ずる色の視覚効果を探求した独自のものである。

私自身、作品に関しては、これまで実際の素材に触り制作する中で、いわば感覚的に生み出してきたものであるが、本稿では作品の表面が持つ、形と色と光の相互作用

用について整理し、今後の作品制作の上で形や色彩を考える手掛かりを導き出したい。

今回は、個展「心の深いところに見える色—セラミックに見る色彩の妙—」(2004.10.5～10.24, Garelia Punto 企画)の出品作品を中心にして見てゆく。

2. 制作の視点(テーマ)およびコンセプト

まず、制作の視点(テーマ)およびコンセプトについて幾つかに分類する。

1つ目は「Surface」シリーズの一連の制作の根底に

ある考え「作品表面上の情報の種類」についてである。シリーズを通して重要なテーマである。

2つ目は「形と色と光」である。これは物理的に生じる見え方に関することである。このテーマには2つの色に対する試みを行なっている。技法とも関わる事象であるが、「Color バージョン」と「Light & Shadow バージョン」の2通りの展開がある。

3つ目は「作品の精神上的のテーマ」である。これは作品の表面上にあらわれる視覚効果のようなものではなく、作品を私が生み出し創造するためのコンセプトである。

以下、3つの視点それぞれについて述べてゆく。

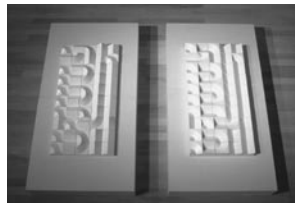
3. 「作品表面上の情報の種類」について

物質というものは、その物質表面に様々な表情を持ち合わせている。

少し遡るが、私が「Surface」シリーズに関わる一連の作品を制作し始めたのは2000年のことである。それ以前とそれ以降では、作品の表面にある表情は大きく変化することになる。



作品1
「境界の向こう側とこちら側」

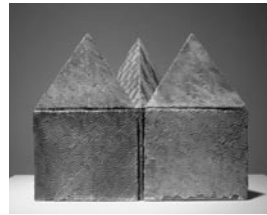


作品2「陰と陽」

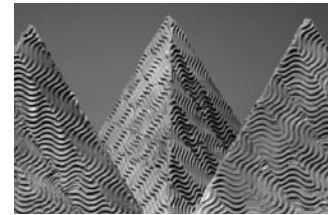
作品1・2は、2000年以前のものであるが、幾何学的な造形を1つのユニットとし、その展開において様々な造形の広がり面白さを探求しようとしたものである。そのため、作品の表面は作品の造形的な形状を際立たせるためにプレーンな質感の白いマット状の釉薬を施していた。このとき作品は空間の中で大きな光に包まれ、その光と影のコントラストによって造形が浮かび上がる。また、このときの意図の中には、大きな空間の中で場をどのように構成するかという空間デザインの視点が大きな意味を持っていた。

しかし2000年辺りを境に、私の中に物質の表面上の奥行きという新しい興味が湧いてきた。それまでの作品はサイズが大きくなっても小さくなくても、見た目は同じ印象を与えるものであった。シンプルではあるが、色や表情の奥行きという意味からは、薄っぺらな印象で

あった。形のみをテーマとしていたので、それ以外の要素は排除していた側面もある。



作品3



作品3の拡大写真

「遠かなる未来の記憶の形II」

この境を後に、作品3にある様な複雑な表面を有する作品を制作し始めた。当初目指したものは作品の表面が時間を含んだように奥行きがあり、一度作品を見始めるとそこに様々な表情を有するものである。

この作品は表面が錆びたような表情を持っているが、人が物を見る際にそのものを理解するために時間を多く費やすように情報の種類を増やしたものである。

情報の種類を増やすということは、作品の表面上に複雑な表情や質感を与える要素を加えるということである。この場合、レリーフ状の波線のパターンを施すこと、そして釉薬の持つ色、錆びた様な質感を作ることである。

これらが重なり合うことで、見る者が物質として理解しようとする時に、目を凝らして観察し、それに要する時間も多く費やされるということになる。

日本の茶陶には、「侘び」「錆び」というものを観る感覚があるが、この物質表面上の情報の質と量というものに密接に関わっているように感じる。

このような流れの中で、私は作品における物質表面上の情報の種類を重要な位置付けと考え、制作の中で模索を続けている。

4. 「形と色と光」について

私たちの認識する世界は、それぞれその空間の中である形を持ち、また特有の色彩をまとい、光が物質に照射され、その反射した光を私たちの目で見ることによって成り立っている。物質を扱うときこれらの要素なしでは、私たちは物質を視覚によって認識（見る）ことが出来ない。

現在私は、作品を「Color バージョン」と「Light & Shadow バージョン」の2つに分類し制作している。この2つの分類分けは、表面に施す色彩によって分けている。それぞれの作品の表面は同じ形状のレリーフパターンを有しているが、「Color バージョン」は、主にその表面に2色の色化粧泥を施し、見る角度によって色の

変化が見られる作品で、「Light & Shadow バージョン」は金属的光沢を持った釉薬を施し、細かな光と影のコントラストを強調した作品である。

これは、作品の制作方法に関わる部分である。先ず全体の制作方法について述べた後、それぞれの特性について触れたい。

以降、個展「心の深いところに見える色-セラミックに見る色彩の妙-」の出品作品を事例に詳細を以下にみてゆく。

●制作方法

作品の制作方法は、加色（施釉）以外は「Color バージョン」・「Light & Shadow バージョン」共通であるが、その過程をまとめておく。

- ・原型作り…写真1の様な模様を持つクラフト紙を基に、作品上面のパターンを作成する。そのパターンを全体の形に切り抜いた発泡スチロールに貼り付け、石膏の原型を作成する。
- ・石膏型作成…原型を基に石膏型を作成する。
- ・泥しょう鑄込み…石膏型に半磁器土（山田窯業原料製）を泥しょう^{*3} 状にし、石膏型に流し込み、成形する。
- ・乾燥…成形された生地を自然乾燥する。
- ・加色（施釉）
「Color バージョン」…化粧泥（マルニ製陶製）をスプレーガンで吹き付け。
「Light & Shadow バージョン」…釉薬（山勝陶料製）、金彩釉（AC-9）を使用、スプレーガンで吹き付け。
- ・焼成…酸化炎焼成、焼成温度 1,160 度、電気窯（15KW）
- ・組立…焼成した作品のパーツをパネルに並べ貼り付ける。
- ・完成

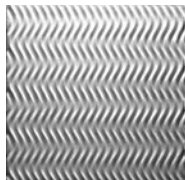
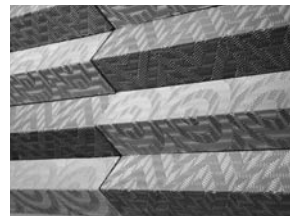
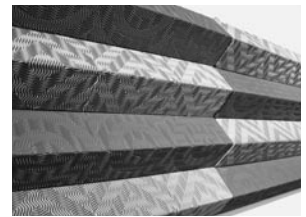


写真1
クラフト紙の模様



作品4 右側から



作品4 左側から

「color バージョン」の作品例

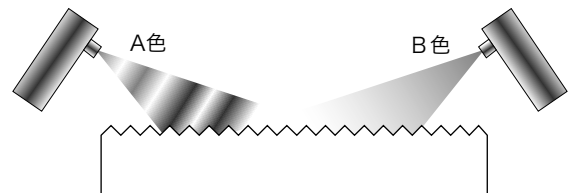


図1 「color バージョン」の彩色方法

に対して、スプレーガンで異なる角度で化粧泥^{*1}を吹き付けることにより制作することができる。図2は、角度により色が見える状態を図式化したものである。

出来上がった表面は、左から見るとA色、右から見るとB色が強く見えてくる。正面からは、両方の色が混ざり合ったように見えたり（中間混合^{*2}）、2色の色からなる細かな模様のように見えたりと、距離や場所によって変化をもたらす。実際に作品の前を通り過ぎると、玉虫のように色に変化する状態を観察出来る。

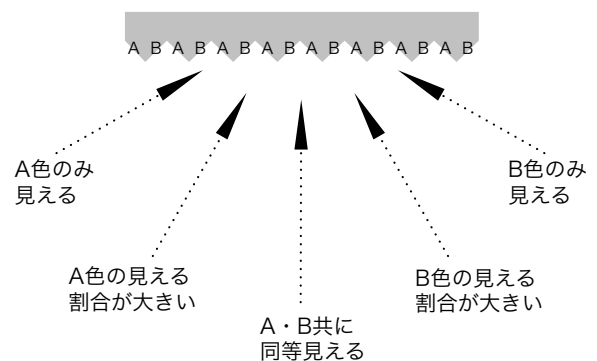


図2 色の変化に関するモデル図

4.1 「Color バージョン」について

「Color バージョン」の作品は、見る角度によってその見える色に変化するものである。

作品4で説明すると、右側から見るときと左側から見るときでは、その色の印象が変わる。

これは、図1のように表面にレリーフ上の溝がある面

作品5においては、光の当たり方で色に変化する事例である。5個ある三角柱のユニットはそれぞれ同じように彩色を配したものであるが、1つつユニットの上下が逆になっている。

図3は、光の当たり方によって見える色が変わることを図式化したものであるが、左側の図は、細かなレリーフの凹凸の上面にA色がある場合で、光はA色に当た



作品5 正面から
「color バージョン」の作品例

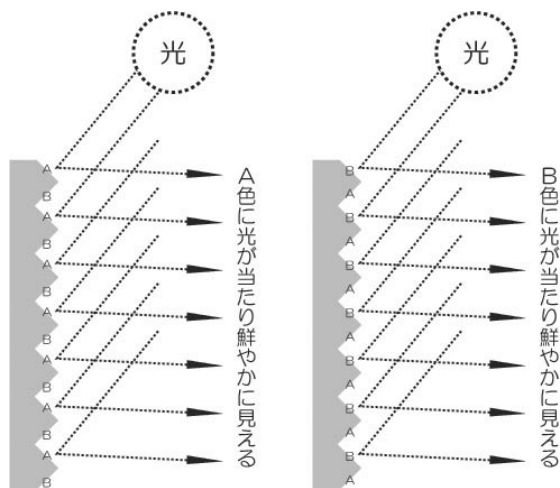


図3
光の当たり方によって見える色が変わることのモデル図

り反射する。このときB色の部分は影となり、その色彩の彩度を落として色が沈んだ印象になる。右側の図はA・Bそれぞれの色の位置が逆になっており、正面から見た場合はB色が光を受けて鮮やかに見え、A色は影の中に沈んで見えることとなる。

この場合も、光の角度や作品を見ている場所や角度に影響され、視覚の上で不思議な効果をもたらす。

また、色の見え方については、独特の表情を作品が持ち合わせているが、これは、2色の色化粧泥を吹き付けることによって出来る中間混色により成っていることが観察できる。

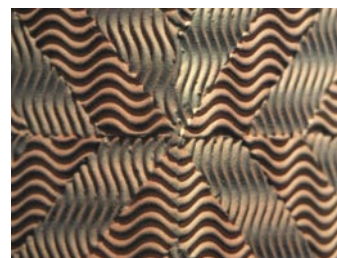
中間混色については、『中間混色とは、人間の外部で起こる光の混色ではなく、元の色は独立した色として存在しているが、混色したような色に見える、人間の内部で起こる「視覚としての混色」である。

たとえば、印刷物のように、色を小さな点で配列し、

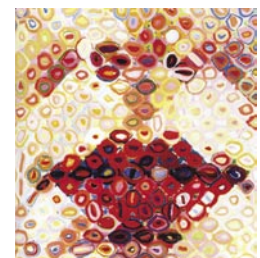
個々の色は混色していないが、ある距離から見たときに個々の色が視覚的には見分けられない状態で並置されている混色である。これを「並置混色」という。〈カラーコーディネーションの基礎 p.157. 引用〉¹⁾ と、定義されている。

また、視覚混色について、チャック・ローズ作の「四月」〈DESIGN BASIC p.240～241〉、絵画に関する事例であるが、いわゆる絵画では印象派とはじめとした芸術家達によって鮮やかな色の表現の可能性を探究した物である。点描という技法が、視覚混色を実現している。

私の作品は絵画のようにその画面上に具体的な像を表すものではないが、「Color バージョン」の作品においては、中間混合による色の作用と、表面に当たる光とが相まって、複雑な色彩表現を実現している。色の見え方と距離の関係については、作品を前にして個別の色が見える状態と、中間混色によって知覚される状態とが、重なり合う距離があり、それが作品の色彩に不思議な効果をもたらしている。



左：「Color バージョン」
表面拡大



右：チャック・ローズ作
の「四月」拡大
〈出典：「DESIGN BASIC」
p.241〉²⁾

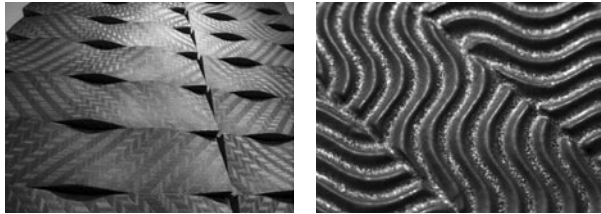
上記の2つの拡大した作品の表面を観察すると、共に細かな色が存在するのが見える。尚、「Color バージョン」の作品においては、表面の細かなレリーフに作り出す陰影も見える色を決定付けている大きな要素になっている。

4.2 「Light & Shadow バージョン」について

作品6は、「Light & Shadow バージョン」における作品である。このバージョンは、作品の表面に当たる光と影に重点を置いて制作したものである。作品の表面は金彩釉（金属的光沢を持った釉薬。金色の結晶が浮かび上がる。）を施したものである。作品表面の波状のうねりと、微細な波のレリーフが光を得ると、その光沢によって面白い表情をまとう。

また、この金属的な光沢は、作品を見るときにその場

所と位置において様々な変化を見せ、常に一定の色合いを観る者に与えず、深い色彩の中に観る者を取り込んでゆく。



作品6
作品6の表面拡大
「Light & Shadow バージョン」の作品例

ここで用いた釉薬は、陶芸の材料から見ると、窯変釉とも言われ、窯の中で釉薬の厚みや窯の温度によって様々に影響を受け変化する。作品6の表面の拡大写真を見ると、凹凸の溝にたまった釉薬の上に金属光沢を持った結晶が浮き出ていることが見える。

窯変釉は、茶陶でいうところの「侘び」「錆び」の色の表現などにも用いられる。

さて、主には光と影で構成される表面であるが、ここでも、光と影で、もたらされる色彩が、なお中間混色によって観る者に知覚される。ただ、「Color バージョン」と異なる点は、細かなレリーフ上には異なる色は存在せず、明度（光沢）の差によって生じる色が作用する。

また、「Light & Shadow バージョン」は、金属的光沢を有する為、作品と視点の角度に変化が生ずると、それに伴って、光沢を持った反射面が作品の表面上で移動したように見える。観覧者の動きに合わせて、反射する位置が移動して見える。これは、光源を固定してある場合、見る位置によって、図4のように光の入射角と反射角より生じる現象である。作品の表面は大きく弧を描いたような形状になっているため、その反射した光の動きはより強調された物になっている。

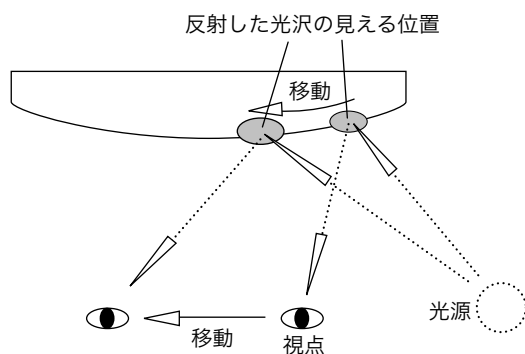


図4 光沢の見え方のモデル図

4.3 「Color バージョン」「Light & Shadow バージョン」のもたらすもの

「Color バージョン」と「Light & Shadow バージョン」いずれにおいても、「作品表面上の情報の種類」に通じる共通の部分を持っている。それぞれ色と光に関して異なった質を見せるが、作品の表面上の情報の種類は、釉薬や色化粧土の持つ単純な色の情報から、より複雑なものになり、作品の上で面白い効果をもたらしている。

最初に触れた「Surface」シリーズ以前の作品と比べると、展開方法はユニットによる構成で共通しているが、作品の位置付けが空間構成の中での造形的な展開から、作品そのものが持つ表面の表情に変化してきた。

それに伴って、作品が見せてくれるものも、形から色へと変化し、作品を鑑賞する者の視点も同じく変化した。

また、私自身の関心も、色や目に見える現象を追うようになってきたが、色や光というものを透して、私自身の制作に対する精神的な興味が変化していることも感じる。それは次の章で述べてゆく。

5. 「作品における精神的テーマ」について

作品における私自身の精神的な位置からのテーマについて述べたい。これは、私自身が作品の形や色を構成する上での重要な手がかりでもある。

「Surface」シリーズの作品からその色を見てゆくと、「Color バージョン」では、作品の出来上がった表面は緋の織物のように繊細で柔らかな印象を与える。また、「Light & Shadow バージョン」は、金属光沢を持ち重厚なイメージがあるが、古都京都の深い色合いの風景や金銀の西陣織を連想させる色合いを持っている。

これらの両シリーズで共通しているのは、私自身が感じる日本の文化に根ざした色の発見と再現である。

「侘び」「錆び」という言葉はそれとつながりを持っているかもしれない。その根本には私自身が日本人であるということ。そして、出生の場が京都という日本の色を感じ取る場所であったということが、私が作品を創る上で無意識のうちに大きく作用しているものだと感じている。

色についていうと、「雅」という言葉に現在とても興味を覚えている。華やかであるが、派手でなく、厳かで、気品のある色。「雅」という言葉が私の中で重なり合っている。このような色の中に私自身が心地よさを感じているのである。

また、いろいろな事象に出会うとき、同じものを見ても違って見たり感じたりすることがある。物質は一定に保たれていても、捕らえる者の変化によって違って見える。見えていることへの疑いと、うつろな実感について面白さを感じている。私の経験の中で培ってきた視覚的な感覚、私自身の中に住まう無意識にもものを見る視点、人が物をどのように観てしまうのか？見えてしまうのか？真実と実態の差異はどれだけのものだろうか？このように「うつろな変化」を、私は作品の中で表現したいと考えている。

6. 個展「心の深いところに見える色-セラミックに見る色彩の妙-」について

展覧会と、その出品作品についてまとめておく。

個展「心の深いところに見える色-セラミックに見る色彩の妙-」は、タイトルにあるように、色を主たるテーマとして開催したものである。

展覧会全体の中では、「Color バージョン」がもたらすうつろな空気の様な色、そして「Light & Shadow バージョン」がもたらす深みのある重厚な色の、2つの色に関わる構成でまとめた。「心の深い哀しみに浮かぶ幸せ心の深い寂しさに浮かぶ愛しさ」「心の深い場所に浮かぶいろ」では、タイトルのあり方も観覧者への言葉として提示している。作品とタイトルは、ある時は同時に、あるときは離れた場所で関わりあうが、展覧会場の中で観覧者が言葉とともに何に出会うのかを試して見たかった。

「阿行」・「吽行」は、お互いの形の組み合わせがネガとポジのようになっており、それを象徴するようなものとして考えた。阿吽という言葉は、梵語の最初の文字と最後の文字で、始まりと終わりを意味し、この2文字を取って世界を現すということである。制作における私の背景にもつながる言葉だということでタイトルにした。

作品は、観覧者に自由に受け止められるものであってよいのだが、私自身のものの見つめ方をこの中に閉じ込めておきたいと考えた。

さて、展覧会のテーマである「色彩の妙」が観覧者にどのように映ったのかを述べておく。これは展覧会場で私自身が観覧者の行動を見た上での判断であるが、作品の色が変化するさまについて、いろいろな角度から作品を観察する観覧者を見ることが出来た。場所による色の変化に気付いた観覧者は作品の前で、位置を変えて何

度も何故そのように見えるのかを確認するような行動をとっていた。

実際、何故そのように見えるのか判らず困惑している観覧者も居り、いくらかの解説をした後も、不可思議な色に見入っている方もいた。

色の面白さについては、展覧会を通じて一定の表現が出来たと私自身評価している。

7. 最後に

以上のように、「Surface」シリーズの視点を整理し、まとめてきた。この中で幾つかの課題が見えてきた。それは、色と光に関するより深い裏付けである。作品とは本来、素材や材料に戯れ、半ば自分自身の感性、そして技術の習熟の中で完成されてくるものである。今回、本稿をまとめながら、色彩に関する具体的な数値についての裏づけや、色が色の性質によって見せる効果についてその探求の入り口が鮮明になってきた。これらを今後深めることは、今後制作を続けてゆく上で、より効果的に作品を創るために、必要なことであると考える。

これからも、いろいろなことがその中から見えてくるのかもしれないが、私自身の創作の中の探求の楽しみでもある。

今回、作品について、いくらかの言葉で綴ってみたが、機会があれば、作品そのものを実際に見て、感じて頂きたい。実物ではなく、作品の写真という形ではあるが、末の作品集をご鑑賞頂ければと思う。

8. 謝辞

今回の作品は、2004.10.5～10.24, Garelia Punto の企画により開催した個展「心の深いところに見える色-セラミックに見る色彩の妙-」の出品作品である。展覧会においては、ギャラリー関係者の多大なる支援を頂き心から感謝申し上げる。また、このような機会を設けて頂いたことも、作品を創作する者にとってその活動の大きな後押しとして大変心強いことである。

今後も精力的に制作活動に勤しんでゆきたい。

参考文献

- 1) 東京商工会議所：カラーコーディネーションの基礎。
p.157, 中央経済社, 東京都 (2004.4)

引用文献

- 2) デービット・ルーアー, スティーブン・ペンタック, 訳
大西央士: DESIGN BASIC: デザインを基礎から学ぶ,
pp.240-241, (株)ピー・エヌ・エヌ新社, 東京都 (2004.1)

語彙説明

- * 1 色化粧土: 粘土に色彩顔料を混ぜた泥上の粘土のこと
- * 2 中間混合: 色の混色で, 絵の具を混ぜるようなものではなく, 視覚の中で複数の色が混ざって見えることをいう
- * 3 泥しょう: 珪酸ソーダーを加えた柔らかい生クリーム状の粘土

展覧会データ

- ◎展覧会名: 「心の深いところに見える色-セラミック
に見る色彩の妙-」 個展
- ◎開催日時: 2004.10.5 ~ 10.24
- ◎開催場所: Garelia Punto 企画 (岡山県岡山市)

出品作品データ

1. 「阿行」・「吽行」 各 w:1457 × h:2190 × d:80 mm
2004.10 ceramic
2. 「心の深い哀しみに浮かぶ幸せ 心の深い寂しさに
浮かぶ愛しさ」 w:1931 × h:458 × d:85 mm 2004.10
ceramic
3. 「心の深い場所に浮かぶいろ」 w:646 × h:459 × d:85
mm 2004.10 ceramic
4. 「うつろいゆく涼やかな風のいろ」 w:1300 × h:340
× d:85 mm 2003.8 ceramic
5. 「うつろいゆく暖かな陽光のいろ」 w:1300 × h:340
× d:85 mm 2003.8 ceramic
6. 「涼風の色」 w:570 × h:650 × d:85 mm 2003.8
ceramic
7. 「陽光の色」 w:570 × h:650 × d:85 mm 2003.8
ceramic
他, 写真なし
8. 「陽光の色」 small w:360 × h:160 × d:300 mm
2003.8 ceramic
9. 「遙かなる未来の記憶の形Ⅱ」 w:360 × h:160 × d:300
mm 2000.2 ceramic
10. 「遙かなる未来の記憶の形Ⅲ」 w:540 × h:180 × d:320

- mm 2000.2 ceramic
11. 「遙かなる未来の記憶の形Ⅳ」 w:470 × h:120 × d:150
mm 2000.2 ceramic

材質: 半磁器 (作品本体)

木材・アルミニウム (パネル部分) 全作品に共通

焼成: 酸化焼成, 電気窯 (15KW)

焼成温度: 1160 度

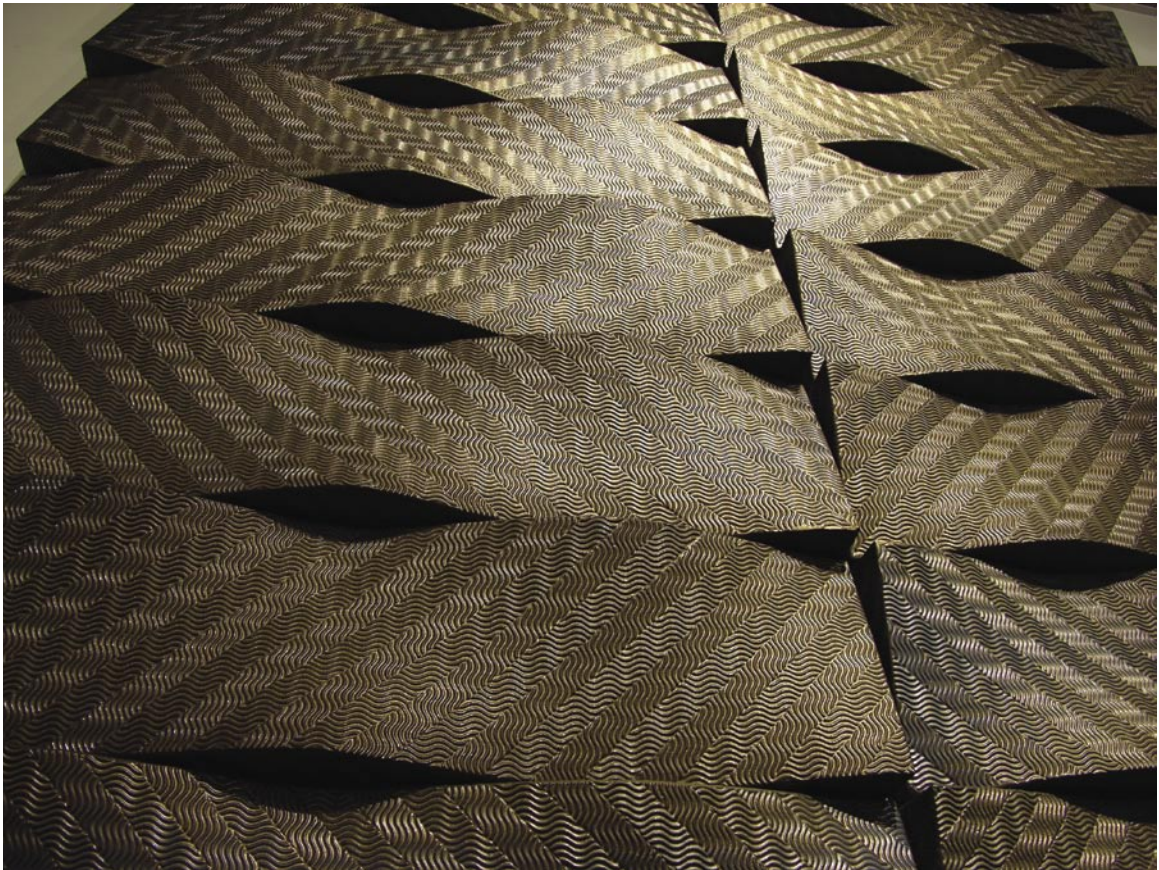
from 「心の深いところに見える色 -セラミックに見る色彩の妙-」

個展 2004.10.5(火)~10.24(日) (Garelia Punto)



「阿行」・「畔行」
各 w:1457 × h:2190 × d:80 mm
2004.10 ceramic







「心の深い哀しみに浮かぶ幸せ 心の深い寂しさに浮かぶ愛しさ」
w:1931 × h:458 × d:85 mm
2004.10 ceramic



(右から見た図)



(左から見た図)



「心の深い場所に浮かぶいろ」
w:646 × h:459 × d:85 mm
2004.10 ceramic





「うつろいゆく暖かな陽光のいろ」
w:1300 × h:340 × d:85 mm 2003.8 ceramic



「うつろいゆく涼やかな風のいろ」
w:1300 × h:340 × d:85 mm 2003.8 ceramic



「陽光の色」 w:570 × h:650 × d:85 mm 2003.8 ceramic



「涼風の色」 w:570 × h:650 × d:85 mm 2003.8 ceramic